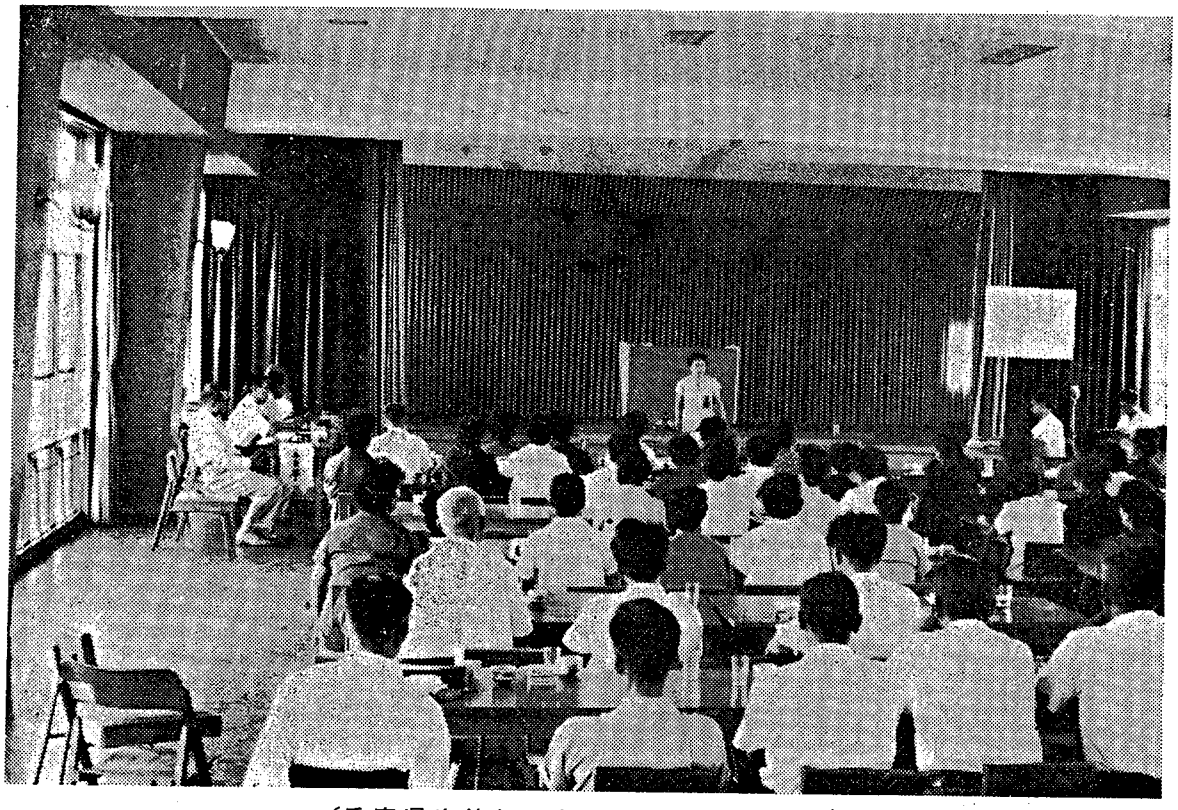
拓水

第卅七号昭和卅四年九月十五日発行
毎月十五日一回発行　一部　十円
昭和卅二年十月十八日　第三種郵便物認可

九　　月



（兵庫県漁協婦人部連合会の結成総会）

兵庫県漁業協同組合連合会
財団法人　兵庫県水産業改良普及協会

水産ニュース

○ 播磨地区の漁婦協人部連合会が結成される

かねてより播磨地区漁協婦人部連合会の設立について、林崎漁業協同組合を中心に関係婦人部で設立の準備中であったが、去る七月二十二日、水産会館において結成総会が開催されいよいよ地区連合会が発足することになった。

これで県下四地区（神戸市、播磨、但馬、淡路）に地区連合会が結成され漁協婦人部の組織も着々と確立することとなった。

☆事務所

林崎漁業協同組合内

☆結成当初の会員

林崎、西二見、阿閉村古宮、阿閉村本庄、高砂、家島、室津、坂越の各単協婦人部。

☆会長

林崎漁協婦人部　浜脇すえの

☆副会長

高砂漁協婦人部　佐伯いくえ

室津漁協婦人部　中橋みつえ

○ 兵庫県漁協婦人部連合会を結成

本県に漁協婦人部が発足したのは、昭和二十九年に県下三つの漁村において、婦人方の自覚により婦人部が結成されたことに始まり、その後県当局並びに関係団体の指導によって婦人部の活動は急速に進展し、現在県下に四二の婦人部が結成され、この間に地区漁婦連（神戸市、播磨、但馬、淡路）が結成されました。

県漁婦連の結成については昨年来より夫々の地区漁婦連において検討中であったが、去る八月七日に各地区漁婦連の正副会長及び関係団体の方が集り、県漁婦連の結成準備会が催しされたところ各地区漁婦連の意見が一致の上、いよいよ県漁婦連結成の運びとなり、八月二十六日午後一時より水産会館において関係者約一〇〇名が参集し、結成総会が開催されました。

開会にあたり県漁連会長より挨拶があり、来賓として県水産課長、農林中央金庫神戸事務所長（代）、兵庫婦人少年室長よりそれぞれ挨拶があり続いて祝電の披露があって、県漁婦連結成について経過報告の、のち議長に山田益栄さん（香住）が選出されて議案の審議に入り午後四時三十分、信漁連会長の閉会の辞によって、県漁婦連の結成総会が閉会された。こうして県漁婦連も結成され婦人部も組織的に着々確立して来た今日、今後の漁協婦人部活動に大きな期待が寄せられている。

なお全国的にも三八県において、漁協婦人部活動が行われており、その内二二県にはすでに県漁婦連が結成されております。また本年度には全国漁協婦人部協議会が結成されることになっております。

☆県漁婦連の事務所

兵庫県漁業協同組合連合会内

☆結成当初の会員

県下四二婦人部

☆県漁婦連役員の氏名

理事（会長）魚井　幸代　江井
〃（副会長）山田田鶴予　東須磨
〃（〃）浜脇すえの　林崎
〃（〃）山田　益栄　香住町
〃　北井　りよ　塩屋
〃　中橋みつえ　室津
〃　松井　米子　柴山港
〃　浜田　竹子　炬口
監事　友光喜代子　駒ケ林
〃　佐伯いくえ　高砂
〃　吉野かつ子　居組
〃　谷口　静子　佐野
〃　村上こきみ　福良

目次

水産ニュース……1
シャコすもじ　助川助六……2
漁業今昔　さんまの巻　平岡安民……3
昭和34年5・6月中の海面漁獲量の概要　兵庫県水産課……5
昭和34年上半期（1～6月）における海面漁獲の概要　兵庫県水産課……8

シャコすもじ

助川助六

ここでいう「シャコ」は漁夫殺しの異名をとる二枚貝のことではなくカマキリのような胸脚とシャベルのような尾扇をもつ甲殻類の仲間を指すのである。

シャコは、別名をシャククワエビとも呼ばれ、漢字では蝦蛄（エビコ）と書きシャコと読ませる。したがってエビの代用として〃鮓ダネ〃に使われる宿命は避けられぬと見えるし、事実、エビほどの美貌でもない。

東京では〃シャコずし〃がたんと喰われるが関西ではネッから食べられぬらしい。このわけを明石の三竜円主人に訊くと、それは東京のエビの値がクルマにしろ、シラサにしろ関西の二倍以上もするから、シャコを代用にするのだという。ニオイはカニの殻を焼いたような按配で味はザリガニに似ていて形は人によっては「舟虫を連想する」そうである。

東京では二流以下の店ではどこでも置いてあるらしいが、一流の店でも客の趣向によってはだすのではないかと臆測する。

シャコは裁鋏で両側と頭と尾の剣を切ってから皮つきのまま味醂または酒、醤油、砂糖で具足煮にしたのが最もうまい、ほんとうの具足煮は小具足をはずさないのが建前であるから、シャコの場合は半具足煮というところであろうか、また空ら揚げにしても美味であるが、ツケ焼にしてもかなりいける。

鬼皮を剝いだものは天プラに使われるが、名古屋では天どんのアゲはエビならぬシャコで幅をきかしているということである

また六、七月ごろのものは塩茹でにしても捨てがたい味をもっているが、白味噌酢にも調和するようである。

しかしシャコの釜揚や皮の剝ぎようの上手下手は鮮度に関係があって生きているものを、そのまま調理するのがコツのようである。またツケ焼の場合は皮がハゼるまで焼くので、ミは皮にひついてしまうが、カニのようにしゃぶり喰うのが美味求真の骨頂である。

シャコにはシャコモドキ、ホソエビシャコ、フトエビシャコをはじめ体色も、とき色から黄褐色、青色、緑色など三十四種類三変種あって、そのうちのシャコとセスヂシャコと他の一種が本県の内海沿岸でとれる。セスヂシャコはからだが小さく七センチぐらいであるが、シャコの方の背丈は普通十五センチほどあって、背中の関節及び隆起線のあとが蟬のそれに似ているところから、西神戸では俗にセミエビといわれている。

シャコの釣り方には餌釣と囮釣とがあつて、後者は鮮人がはじめたと伝えられる。

即ち干潮時の砂泥を掬いとったあとに小な穴があって、泡を立てていればシャコが棲んでいるので、その穴に囮のシャコをほどほどに入れ、指先で動かすと、先住のシャコは仲間の家宅侵入をいきどおって囮を追いだしにでてくるので、指ではさみとり、三、四十はわけなくとれるということである。

「すし」は一名「すもじ」ともいい、鮓または鮨とも書き、和歌山のチヤリ子ずし（小ダイ）、アユの姿ずしや吉野のツルべずし（桜アユ）長浜のマスずし、大津のフナずし、宇治のウナギずし、玉野のママカリずし（サッバ）、富山のカブラずし（ブリ）、京都および讃岐のサバずしなどが知られているが、今では馴鮨（なれずし）ならぬ〃にぎり〃の上物にマグロ、小ダイ、スズキ、コハダ、エビ、エビそぼろ、アワビ、アカガイ、トリガイ等々が使われる。

昔は、マグロなどは鮮度が保持できなかったため醤油に漬け込んでおかれたといい、マグロのことを、〃ヅケ〃というのはここから生れたのだという。つまり醤油漬で保存されたマグロは鮓材に切られて使われ、当時は上品ではなかったということである。

したがって恰も昔のマグロのように外道扱いされる「シャコすもじ」も、やがては趣向にかなって冤を雪ぐ時節が到来しようというものである。

漁業今昔

さんまの巻

平岡安民

長箭沖の大漁は明かに大きなマイナスであった。網を半分失ったことはその後の成績を決定づける転機となった。

その上に又新しい強敵がそこに待ちうけていた。一夜元山沖五十マイル長箭と新浦の中間の海上で投網した。初夏の海は油を流したように静かであった。この日は宵からいるかの大群が周囲にいて、盛んに例の豚に似た奇声を上げて騒々しく、のったり運動、ジャンプ運動をくり返していた。その数は目のとどく範囲だけでも何千頭というおびただしいものであった。しかしいるかは非常に憶病なやつで網を恐れること一通りでなく随って網にかかった魚を食いにきたり。網を破ったりする心配はまづない。安心していてよい相手である、とこう信じていた。ところがこの夜はどうも常とはちがっているように思へた。

網ののびている方面に特にいるかの群が多いようだ。中にはおどり上って横ざまにドタンと落ちるあのぶざまなジャンプやり損いの姿をありありと思わせる音をする。思い思いのポーズで大荒れに荒れているようすが手にとるように聞こえてくる。まさかと思っていたが朝になって網を揚げにかかると、網はずたずたに食いちぎられている。まさに完膚なきありさまである。

「コン畜生」と一同歯がみをしてあたりをにらんだが、もうその頃にはひっそりとした海上には一ぴきのいるかの姿も見られない。さんまをたらふく食ってあと白浪ときえうせたのである。

この網ではもう漁ができぬので、群仙港の佐々木桟橋に繋留して補修と同時に四五反の新しい網をつくった。これに約一週をついやし咸北海域に出漁した。夏の北日本海は連日倦怠を催すような無風のなぎである。夜間と午前中は濃いガスが立ちこめて仕事をしていてもあごからポタポタ滴が落ちるほどである。この退くつな海で漁も四、五百貫くらいの薄漁がつづいた。このあたりからシベリア沿岸にかけてさんまが北上の限界に来て夏をすごす停滞状況にあるので、どこも平均に薄い魚がいるように見受けられた。

この位の漁でも、まあ七月中頃、いわし漁期の初まるまでやろうと思っていたが、ここに又別の邪魔者が現れた。大ふかの群が毎夜網を襲うようになったのである。時々大敷網にとれる三、四十貫位のあいつらしい。青ざめに似た敏捷そうなやつで歯も鋭い。網にかかったさんまを片端から食い荒していくので、大小数十カ所の大破れが毎日のようにできている。そこでこいつを退治しようと鍛冶屋にたのんで四寸位の丈夫な釣鈎を五十本ほどつくってもらい、あり合わせのロープにつけ、さんまを四、五尾づつ、つけて網の端につないでおいた。朝になって引上げてみると何本かの鈎は直線にのびていて、ふかが食って逃げたあとが歴然としている。さじを投げる外ない。三人位力をこめて引いてみてものびぬ鈎を引きのばして逃げる奴の底知れぬあごの力に唖然たるのみである。

ここに到ってさんまもふかもとれぬことになったので。いよいよ漁を終り一路南下浦項に帰港したのは七月の中頃であった。

二カ月半の間に漁獲量五万貫余り北鮮では鮮魚が利かず塩蔵することが多かったので値も安く、金額で四万円程であった。網の消耗がなかったらかなりの利益となったであろうが戦時中の貴重な資材を多く失いその上夏の乾燥不良の天気が禍して網を腐らしてしまったので採算上あまりよい結果が得られたとはいえなかった。

翌年はさんまの少い年に当り、（とびうおと同じく隔年に豊漁がある）それに燃料油不足、空襲の脅威などで出漁も想に任せず、漁獲高は前年の四分の一という不調に終った。

この年は一つの危険に遭遇した忘れ難い年でもある。

四月末のある夕方、迎日湾の東沖四十マイル位の所で投網したが北東の風が強くなって雨も激しくなり、天候が悪化してきたので早目に見切

りをつけて揚網帰港にかかった。午前二時頃東海岸随一の難所チャンギー岬灯台に来た頃には風速十五米以上の強風となり波にたたかれる度に舷が二つに折れはせぬかと恐れられた。潮流の影響で特に波がけわしい所である。しかもこの灯台から一マイル余り沖に横たわる魔の岩礁は深さ一米内外というもので、ベタなぎの時と荒天の時とが共に恐ろしいのである。この暗礁にぶっつけて無事にすんだ船はまったくない。

いやでもこの魔の海を通らねば浦項へ入港できぬのである。漸く灯台の光によって陸岸との距離を想定できるのであるが、それも大粒の雨がブリッジの窓をあけて乗り出している顔面へ叩きつけてくるので、休みなく眼を顔をなでこすっているくらいであるから、視力も十分働かない。灯光は或は近く或は遠く光るたびにその光力がちがうのである。はっきりと距岸どれくらいという判定がむつかしい。そこへもってきて前方を瞬きもせず、にらんでいるとはいうものの、白布を敷きつめたように波という波が折れてくだけて泡立っている海面は、普通に折れている波か暗礁の上で折れている波かの区別もつかない。昼間ならそうでもあるまいが、暗たんたる闇夜で数十米先の海面が波しぶきのためにろくに見えぬくらいである。灯台とコンパスをたよりのめくら航法である。

突然猛烈な衝撃と共に、船の進行はとまり、よろめくように大きく左舷に傾いた。わけのわからぬことばをわめきながら漁夫らは船室からとび出してきた。そして常に最も恐れている命とりの暗礁に乗り上げたことを知って、そこへへたばって打ちこむ波に流されぬようサイドやブリッジにしがみついたまま泣きだした。

「ああもう駄目だ」

「もう助からん」

「今死ぬんだ」

口々に勝手な短い文句を呟いては

「アイゴー」

「アイゴー」を合唱するのである。この場合全力をつくして危急の場をのがれようと考え行動しようとするものは二、三人に過ぎず、あとの連中はもう沈もうと流されようと、どうにでもなれと締めたか、唯手放しで泣きわめいているばかりである。

伝馬をおろしてみても全員が乗れぬし、この大波では伝馬も浮かぬ。陸は、きばのようにとがった岩がそそり立つ荒磯で、かって練習船快鷹丸が遭難した名だたる難所である。

いづれ船底は大破しているだろうしスクリューも勿論だめだろう。十人の乗員殊に四、五人の泳げない人々をいかにして救うかを、とつおいつ考えながらも、わたくしは船首から打ちこんで来る波を五枚六枚と数えながらラットを握って次に来る事態を凝視していた。たまに一、二枚来る大波で船がどうにかなってしまうか、ひょっとしたら岩礁を離れる。この解決を待っていたのだ。船は今にも横にころびそうになりながら岩の上で身もだえしている。随分長い時が経過したような気がするのであるが、波の数を十位かぞえた間である。やって来た。十米近くもあろうと思われる一きわ高い波が屏風をたおすようにおおいかぶさってきた。ゴロゴロと岩の上で波に小づきまわされていた船は一時波の下に消えてしまったであろう。ところが次の瞬間この特大の波に乗って数百米放り出された。岩礁から持ち上げられて、そして投げとばされたのである。機関が動いていたので前進をやってみると意外にもスクリューも無事で船は進んでいる。やがてずるずると沈没するだろうと思ったが、そうでもない。乗員もどうやら流されずに皆いるらしい。一刻も早くこの難所を通過して湾内にはいれば浸水していてもなんとか命だけは助かる。各舱口をあけて監視しているがアカがはいる様子もない。

「助かった」一同悪夢からさめたように、くらがりながら顔見合せて腰を抜かしていた二、三人も元気がでて立ち上った。

やがて夜が明けて、風雨の中であるがドックに上架して調べた。ところが船底大破どころか傷さへもないそれこそ夢ではなかったのかといいたいくらいである。どうやら、わかめなどの密生した平たんな所に船の中央部から前方だけデンと座っていたもようである。人々も

「この時化にあの人殺し岩にのりあげてかすり傷もないとは奇蹟だ」

とあきれていた。

この夜は家でも一と騒ぎやっていたのである。信心屋である妻の母は夜半頃起きだして日頃信仰する不動明王さまにお灯明をあげておがみだした。

「今夜は沖で大変なことができる」こういって脂汗を流して一心不乱につまりかんたんをくだいて祈りつづけるのである。こうなると妻もこ

どもたちまで気味わるくなって、お経の声と窓を叩く風雨の音におびえながらおばあちやんの後に、夜もすがら座っていたというのである。

「わしがおがんだので船が助かったのじゃ」とおばあちやんは堅く信じているので、無神論者のわたくしもいつものように鼻で笑うわけにはいかぬのであった。

その後十年の歳月は流れて、昭和二十八年十一月末頃、李ライン附近のよこわ曳縄漁場で広い範囲にわたるさんまの大群を見た。この時数日間に出逢った魚群は、かって長箭沖の大群のときのそれよりも更に濃厚なものであった。又毎年十一月から五月頃にかけて度々目をみはるような魚群に出くわしている。もし近い将来この海区が安全となれば冬の漁期中に五万貫の水揚は不可能ではないと思われる。

しかし、これには冬の海に適する稍々大型の船を必要とするであろう。わたくしはこのような夢を描き、もろもろの皮算用に余念なき間だけでもわが年をわすれ、結構仕合せなのである。

昭和34年5・6月中の海面漁獲量の概要

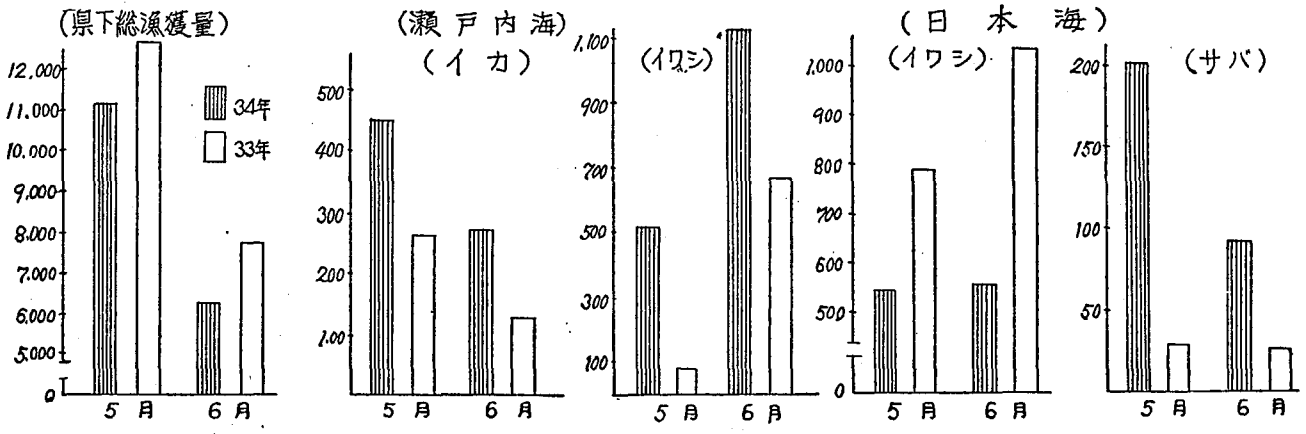
兵庫県水産課

今期は、瀬戸内海では、イカナゴ漁業が終漁期となり、これに代ってイワシの漁期に入った。日本海では底びき網漁業が九カ月間の漁期を終了した。五月中の総漁獲量は、一一、一二二トンで、前年同期の八九%平年漁獲量（昭和二九～三三年平均）の一一二%となっている。

瀬戸内海では、イワシが出足好調で、前年同期の七倍の漁獲あり、イカナゴは前年同期の七割で平年並の漁獲であった。タコはやや不調であるが、イカが底びき網などにより多くとれている。日本海では、イワシタラ、アジ、ハタハタ、ニギスが前年の七～八割の漁獲、カレイ、スルメイカ、タコは相当増加（三～七割）している。近年不漁つづきのサバは前年同期に比して約七倍の漁獲をあげている。

六月中の総漁獲量は、六、二八七トンで前年同期の八五%、平年漁獲量の九六%である。瀬戸内海ではイワシが好調で前年の八割増であるがイカナゴは終期となり、前年の½以下に止っている。二月に始ったイカナゴ漁業も今期で終り総漁獲約一三、〇〇〇トンで平年（一一、五〇〇トン）より多かったが前年の八割止りであった。その他アジ、サワラ、タコは前年同期の五～八割の漁獲でエビ、カレイ、イカは四～一〇割の増加を示し、とくにマイカは好漁であった。日本海では底びき網漁業が休漁期に入り沿岸漁業の巾着網、一本釣、浮敷網が操業されているが、イワシとスルメイカが極度に悪く前年の½である。サバは引続き好調でブリ、ハマチとともに前年の三倍を上廻る漁獲をあげている。

昭和34年月別漁獲量と昭和33年月別漁獲量との比較は下のグラフの通り



昭和34年5月中の海面漁獲量　単位：トン

海区 年度 / 魚種		県総計 34年	県総計 33年	県総計 増減量	県総計 率	瀬戸内海 34年	瀬戸内海 33年	瀬戸内海 増減量	瀬戸内海 率	日本海 34年	日本海 33年	日本海 増減量	日本海 率
総計		11,122.0	12,473.7	△ 1,351.7	89	5,867.0	6,906.8	△ 1,039.8	85	5,255.0	5,566.8	△ 311.8	94
魚類	イワシ	1,054.1	853.5	200.6	130	518.6	72.7	445.9	710	535.5	780.8	△ 245.3	69
	イカナゴ	3,681.8	5,219.8	△ 1,538.0	71	3,681.8	5,,219.8	△ 1,538.0	71				
	タラ	2,007.7	2,209.7	△ 202.0	91					2,007.7	2,209.7	△ 202.0	91
	カレイ	814.6	547.8	266.8	149	56.3	105.9	△ 49.6	53	758.3	442.0	316.3	172
	タイ	115.7	72.0	43.7	161	109.5	66.1	43.4	166	6.1	5.9	0.2	103
	サバ	206.4	32.8	173.6	629	4.6	3.6	1.0	128	201.7	29.1	172.6	693
	アジ	477.8	569.6	△ 91.8	84	10.7	25.7	△ 15.0	42	467.1	543.8	△ 76.7	86
	サワラ	24.0	44.7	△ 20.7	54	23.9	44.7	△ 20.8	53	0	0		
	ブリ ハマチ	110.3	111.1	△ 0.8	99	0				110.3	111.1	△ 0.8	99
	ボラ	21.1	16.6	4.5	127	21.1	16.6	4.5	127				
	ハモ	22.3	18.4	3.9	121	20.3	18.4	1.9	110	2.0		2.0	
	アナゴ	64.3	75.1	△ 10.8	86	64.0	73 1	△ 9.1	88	0.2	3.0	△ 1.8	10
	シイラ												
	サメ	17.1	18.0	△ 0.9	95	14.8	3.9	10.9	380	2.3	14.1	△ 11.8	16
	ハタハタ	383.5	531.0	△ 147.5	72					383.5	531.0	△ 147.5	72
	ニギス	309.3	351.4	△ 42.1	88					309.3	351.0	△ 42.1	88
	その他の魚類	351.4	465.6	△ 114.2	75	221.2	262.3	△ 41.1	84	130.2	203.3	△ 73.1	64
	（魚類計）	9,661.4	11,137.1	△ 1,475.7	87	4,747.0	5,912.8	△ 1,165.8	80	4,91.3	5,224.3	△ 310.0	94
その他の水産動物	スルメイカ	223.2	126.9	96.3	176					223.2	126.9	96.3	176
	その他のイカ	441.6	268.9	172.7	164	439.9	267.6	172.3	164	1.8	1.4	0.4	12
	タコ	281.7	317.4	△ 35.7	89	258.3	299.2	△ 40.9	86	23.4	18.1	5.3	129
	エビ	147.2	130.6	16.6	113	144.0	126.9	17.1	113	3.3	3.7	△ 0.4	89
	カニ	1.5	3.5	△ 2.0	43	1·5	3.5	△ 2.0	43				
	ナマコ	32.2	29.3	2.9	110	32.1	29.3	2.8	110	0			
	その他の水産動物	2.2	8.5	△ 6.3	26	1.1	8.4	△ 7.3	13	1.2	0	1.2	
	（水産動物計）	1,129.6	885.1	244.5	128	876.8	735.0	141.8	119	252.8	150.1	102.7	168
貝藻類	貝類	176.2	143.0	33.2	123	165.2	135.4	29.8	122	11.0	7.5	3.5	146
	藻類	154.9	308.5	△ 153.6	50	77.9	123.6	△ 45.7	63	77.0	184.9	△ 107.9	42

（注）△は減　○は漁獲量50kg未満（漁獲量50kg以上は100kgに切上げ）

昭和34年6月中の海面漁獲量　単位：トン

海区	魚類	年度	県総計 34年	県総計 33年	県総計 増減量	県総計 率	瀬戸内海 34年	瀬戸内海 33年	瀬戸内海 増減量	瀬戸内海 率	日本海 34年	日本海 33年	日本海 増減量	日本海 率
	総計		6,286.7	7,370.2	△ 1,083.5	85	4,214	4,900.3	△ 686.1	86	2,072.5	2,469.9	△ 397.4	84
魚類	イワシ		1,668.5	1.685.2	△ 16.7	99	1,122.3	646.8	475.5	174	546.1	1,038.4	△ 492.3	53
	イカナゴ		1,087.7	2,326.9	△ 1,239.2	47	1,087.7	2,326.9	△ 1,239.2	47				
	タラ		137.8	110.9	26.9	124					137.8	110.9	26.9	124
	カレイ ヒラメ		95.2	74.6	20.6	128	66.6	47.4	19.2	141	28.5	27.3	1.2	104
	タイ		67.7	61.8	5.9	110	58.1	49.7	8.4	117	9.7	12.2	△ 2.5	80
	サバ		89.9	31.2	58.7	288	1.2	6.2	△ 5.0	19	88.8	25.1	63.7	354
	アジ		870.5	657.9	212.6	132	130.3	257.4	△ 127.1	51	740.3	400.4	333.9	185
	サワラ		33.4	46.8	△ 13.4	71	33.4	46.8	△ 13.4	71	0	0		
	ブリ ハマチ		54.0	16.6	37.4	325	0		0		54.1	16.6	37.5	325
	ボラ		15.1	18.9	△ 3.8	80	15.1	18.9	△ 3.8	80				
	ハモ		35.8	39.0	△ 3.2	92	35.8	39.0	△ 3.2	92	0		0	
	アナゴ		53.0	59.1	△ 6.1	90	53.1	58.8	△ 5.7	90	0	0.3	△ 0.3	
	シイラ			0	△ 0							0	△ 0	
	サメ		13.0	16.2	△ 3.2	80	12.7	16.0	△ 3.3	79	0	0.2	△ 0.2	
	ハタハタ		31.8	39.2	△ 7.4	81					31.0	39.2	△ 7.4	81
	ニギス		7.3	36.7	△ 29.4	20					7.3	36.7	△ 29.4	20
	その他の魚類		458.0	428.5	29.5	107	379.4	338.4	41.0	112	78.6	90.1	△ 11.5	87
	（魚類計）		4,719.0	5,649.6	△ 930.6	84	2,995.8	3,852.4	△ 856.6	78	1,723.2	797.2	△ 74.0	96
その他の水産動物	スルメイカ		280.1	618.8	△ 338.7	45					280.1	618.8	△ 338.7	45
	その他のイカ		283.7	131.5	151.9	215	275.6	124.6	151 0	221	8.1	7.2	0.9	113
	タコ		359.1	439.3	△ 80.2	82	349.9	433.3	△ 83.4	81	9.2	6.0	3.2	153
	エビ		481.2	347.5	133.7	138	480.9	347.3	133.6	138	0	0.3	△ 0.3	
	カニ		22.3	11.1	11.2	201	22.3	11.1	11.2	201				
	ナマコ		1	0.9	0.1	111	1	0.9	0.1	111				
	その他の水産動物		3.2	1.3	1.9	246	3.2	1.3	1.9	246				
	（水産動物計）		1,430.4	1,550.7	△ 120.3	92	1,132.8	918.4	211.4	123	297.6	632.3	△ 334.7	47
貝類	貝類		72.5	102.6	△ 30.1	71	69.2	98.7	△ 29.5	70	3.3	3.8	△ 0.5	87
藻類	藻類		64.8	67.5	△ 2.7	96	16.3	30.9	△ 14.6	53	48.4	36.6	11.8	132

（注）△　減　　○は漁獲量50kg未満（漁獲量50kg以上は100kgに切上げ）

昭和34年上半期（1月～6月）における海面漁獲の概要

兵庫県水産課

(1) 総漁獲量

昭和三十四年上半期（一月～六月）における兵庫県下の海面総漁獲量は四三、五九二トンで、昨年同期より七％少ないが、上半期の平年漁獲量（約四一、〇〇〇トン）より六％（二、六〇〇トン）多い。

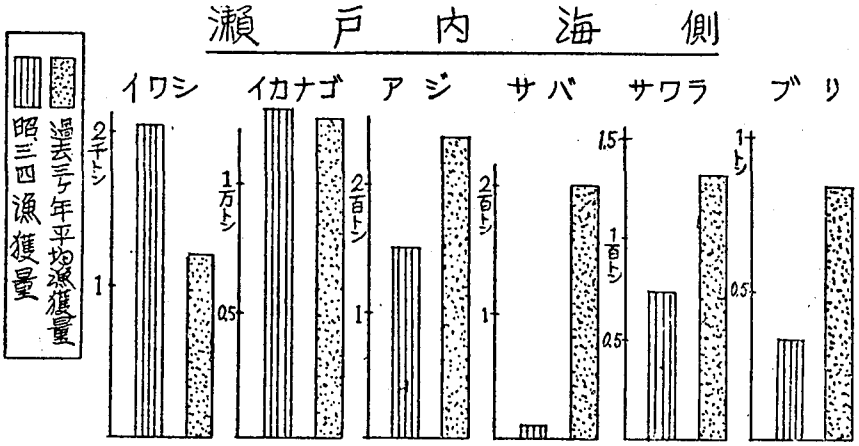
これは、瀬戸内海側において、イカナゴこまし網漁業が平年を稍々上廻る漁獲をあげたことと、イワシ船びき網漁業が漁期に入り（五月から）順調な水揚げをしていることが主な原因で日本海側においては、中型機船底びき網漁業が稍々不振であったことと、イワシ巾着網漁業の漁獲が、かんばしくないため上半期の漁獲実績は平年より少ない。

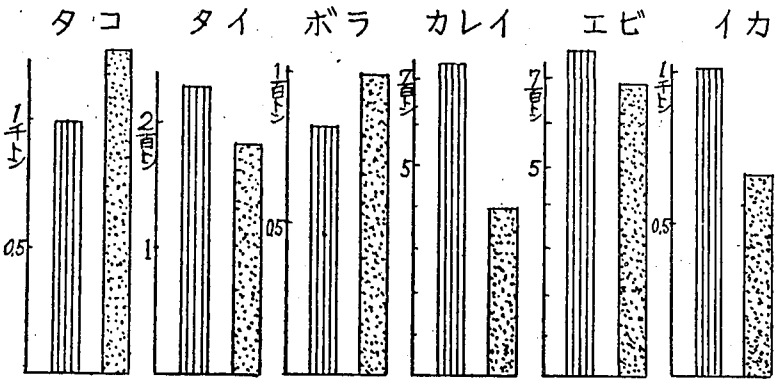
(2) 瀬戸内海

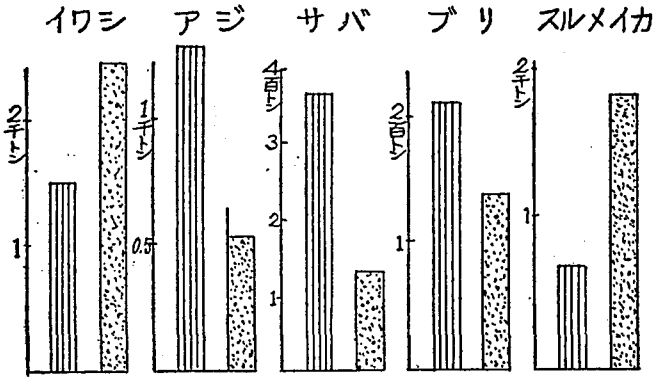
瀬戸内海側における上半期の総漁獲量のうち五〇％～六五％はイカナゴが占めるため、イカナゴの豊凶は上半期の漁獲の良否を決定するが、さきに述べたようにイカナゴは平年漁獲量（約一一、〇〇〇トン）を上廻っており、これに加えイワシ船びき網漁業の出足が、よく、更に小型機船底びき網漁業の主要漁獲物である、カレイ、エビ、イカなどが平年以上の漁獲をあげているので、内海側の総漁獲量は昨年の同期総漁獲量より六％少ないが（昨年は、イカナゴが特に豊漁であったため）平年の上半期漁獲量（二〇、六〇〇トン）を一八％も上廻っている。しかし、サワラ、ブリ、タコなどの高級魚の漁獲は依然として不振である。大衆魚で本年漁獲の特に少ないものは、アジ、サバでアジは昨年同期の四九％、サバは六五％である。

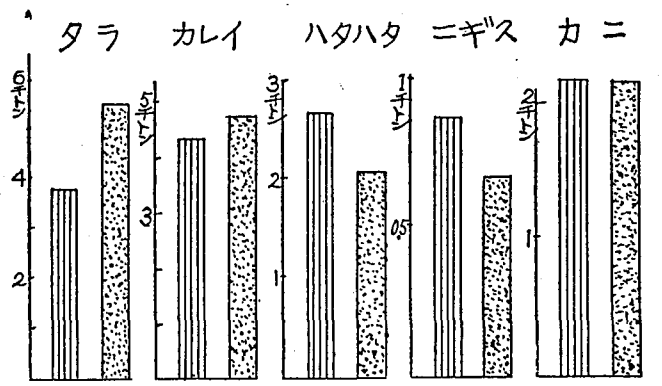
(3) 日本海

日本海側における上半期の総漁獲量は、昨年同期漁獲量の九一％、同期平均漁獲量の九三％である。これは中型機船底びき漁業が今年に入って稍々不振で例年の九〇％の水揚げしかあげていないことが主な原因でこの漁業の漁獲物のうち特にタラ類の減少（昨年の七五％）が目立っている。また四月から漁期に入ったイ









昭和34年上半期(1月～6月)海面漁獲量　（単位：トン）

海区	年度 / 魚種	県総計				瀬戸内海				日本海			
		34年	33年	増減量	率	34年	33年	増減量	率	34年	33年	増減量	率
総計		43,592.2	46,895.5	△ 3,303.3	93	24,220.2	25,698.6	△ 1,478.4	94	19,372.0	21,196.9	△ 1,824.9	91
魚類	イワシ	3,549.4	3,073.4	476.0	115	2,054.3	818.6	1,235.7	251	1,495.1	2,254.8	△ 759.7	66
	イカナゴ	13,429.1	16,702.6	△ 3,273.5	80	13,429.1	16,702.6	△ 3,273.5	80				
	タラ	3,820.	5,098.2	△ 1,277.6	75					3,820.6	5,098.2	△ 1,277.6	75
	カレイ ヒラメ	4,946.6	4,692.1	254.5	105	731.5	524.4	207.1	139	4,215.1	4,167.7	47.4	101
	タイ	264.5	222.3	42.2	119	229.8	175.3	54.5	131	34.7	47.0	△ 12.3	74
	サバ	380.5	75.	305.4	507	7.3	11,3	△ 4.0	65	373.2	63.8	309.4	585
	アジ	1,479.8	1,302.7	177.1	114	154.6	313.9	△ 159.3	49	1,325.2	988.8	336.4	134
	サワラ	75.7	110.7	△ 35.0	68	75.6	110.7	△ 35.1	68	0.1		0.1	
	ブリ ハマチ	212.1	166.8	45.3	127	0.3	0.6	△ 0.3	50	211.8	166 2	45.6	127
	ボラ	85.8	93.6	△ 7.8	92	85.3	93.3	△ 8.0	91	0.5	0.3	0.2	167
	ハモ	72.9	68.6	4.3	106	65.1	62.5	2.6	104	7.8	6.1	1.7	127
	アナゴ	378.9	418.5	△ 39.6	91	377.1	416.0	△ 38.9	91	1.8	2.4	△ 0.6	75
	シイラ												
	サメ	194.8	221.0	△ 26.2	88	49.0	29.3	19.7	167	145.8	191.7	△ 45.9	76
	ハタハタ	2,763.5	2,234.5	529.0	124					2,793.5	2,234.5	529.0	124
	ニギス	892.6	1,152.0	△ 259.4	77					892.6	1,152.0	△ 259.4	77
	その他の魚類	2,009.5	2,065.8	△ 56.3	97	1,284.8	1,233.7	51.1	104	724.7	832.1	△ 107.4	87
	(魚類計)	34,556.3	37.698.0	△ 3,141.7	92	18,543.8	20,492,3	△ 1,948.5	90	16,012.5	17,205.7	△ 1,193.2	93
その他の水産動物	スルメイカ	656.4	1,074.2	△ 417.8	61					656.4	1.074.2	△ 417.8	61
	その他のイカ	1,048.9	660.8	388.1	159	1,011.8	618.0	393.8	164	37.1	42.8	△ 5.7	87
	タコ	1,122.5	1,359.0	△ 236.5	83	1,007.0	1,253.1	△ 246.1	80	115.5	105.9	9.6	109
	エビ	892.2	778.2	114.0	115	766.0	689.4	76.6	111	126.2	88.8	37.4	142
	カニ	2,196.1	2,336.9	△ 140.8	94	34.9	27.4	7.5	127	2,161.2	2,309.5	△ 148.3	94
	ナマコ	294.5	317.6	△ 23.1	93	293.4	317.1	△ 23.7	93	1.1	0.5	0.6	220
	その他の水産動物	43.3	34.2	9.1	127	20.0	28.9	△ 8.9	69	23.3	5.4	17.9	431
	(水産動物計)	6,253.9	6,561,0	△ 307.1	95	2,133.1	2,933.9	199.2	107	3,120.8	3,627.1	△ 506.3	86
貝藻類	貝類	1,839.5	1,828.0	11.5	101	1,745.6	1,736.2	9.4	101	93.9	91.8	2.1	102
	藻類	942.5	808.5	134.0	117	797.7	536.3	261.4	149	144.8	272.2	△ 127.4	53

（注）△は減　漁獲量100kg未満　4捨5入

ワシ巾着網漁業及びイカ一本釣漁業は、ともに漁期始めであるが昨年の七〇%前後の漁獲で平年以下の漁獲である。

特に漁獲の増大したのはアジとサバで過去三カ年同期平均漁獲量の二倍以上をあげており、瀬戸内海側と反対の現象を呈している。

発行所　神戸市兵庫区新在家町 123　兵庫県立水産会館内　兵庫県漁業協同組合連合会
発行人　三浦清太郎